武德成業

四十二

内閣文庫
番號 和 15251
冊數 63 (42)
函號 150 12

内閣文庫
和書
類 五二五一
號 六〇
冊 三
函 五〇
架 四

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
天元實記

武德成業卷之四十二

伯耆守加藤正脩編

淺草文庫

九月朔日　内府公江戸御出馬之在外桜田御門を出
御出別濃州岐阜表より前橋を経て先達而西門
より出遣ハ場之義門前より直中仕出
芝神明の社を御小さき程ての宮立て其前に
萱葺の洋殿有り其上に御上り之在前橋と申
在出候夫より出発行ハ く惣上ハ内又出在出候
和尚は大門を出遣よ和出ハ同道ハ中堂へ御上り

[illegible]
の記録[illegible]本堂より於[illegible]大衆より法問[illegible]
[illegible]何角[illegible]報[illegible]と書[illegible]
[illegible]より於[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

古人物語
世ニ云岐阜ノ城落テ首ヲ江戸ノ神明ニテ御覧御出馬ト云
リ僞也八月廿九日ニ増上寺ニテ御門出ニ法問御聞被成候
岐阜ノ前ニ刈田ニ出ル者ヲ十一人首ヲ取リ物初トテ遣候

ヲ神明ニテ御覧被成候也九月朔日江戸御立被成嶋田ニテ
岐阜落城ヲ御聞被成候也増上寺御門出ノ時法聞御聞候ニ
清淨ノ二門ト云法問アリ是ハ惡人モ彌陀ヲ信スレハ能ト
云フ也然ルニ増上寺和尚存翁此法問ヲ御好候ニコレハヲ
キ被申唯我獨尊ノ法問ヲ語リ被申候時法問違候ト上意ノ
時存翁被申候何ノ後生入可申候ヤ弱キ事ヲ今ヨリ
内府様ハ釋迦也ト御申候是故　權現様御一代御嘉例
ニ成増上寺ヘ御門出被成候也存翁後ニハ國師ニ被成ト存
翁弟子郭山子皈子后増上寺ト十ル也

武德大成
慶長五年九月辛丑朔　神君江戸城ヲ發ス異父弟松平
因幡守康元ヲメ本城ヲ守ラシメ石川日向守家成菅沼織部
正定盈諏訪安藝守頼忠内藤仁兵衛尉忠政ヲ西城ノ處守ト
シ板倉四郎右衛門尉勝重ヲ町奉行トス時ニ石川日向守爲
ニ告テ曰今年今日西塞リナリ願ハ他日ヲ擇ンテ西征ノ發
途シ玉フヘシ　神君曰西塞リナル事ハ我往テ是ヲ閑
シ則御馬ヲ進メ給フ此時相州小田原ハ大久保相模守忠隣
是ヲ領シ其家士守之駿府興國寺ノ西城ハ菅沼志摩守定仍
城主中村一學ニ代ツテ是ヲ守ル沼津城ハ内藤三左衛門信

成領之又山内對馬守一豊ニ代テ遠州掛川城ヲ兼テ守ル豆
州韮山城ハ内藤紀伊守信正是ヲ守ル濱松城ハ保科肥後守
正光城主堀尾忠氐ニ代ツテ是ヲ守ル横須賀ハ三宅惣右衛
門康貞其子越後守康信城主有馬豊氐ニ代ツテ守之西尾ノ
城ハ水野六左衛門勝成田中筑後守長政ニ代ツテ是ヲ守ル
尾州清洲城ハ石川左衛門大夫康通松平玄蕃頭家清小笠原
新九郎安元小笠原安藝守信元千賀孫兵衛尉毛呂崎ヲ守テ
九鬼大隅守嘉隆ヲ防ク上州高崎城諏訪小太郎頼永是ヲ守
ル信州伊奈城ハ京極修理大夫高知是ヲ守ル小諸ノ城ハ仙

石越前守秀久是ヲ守ル諏訪城ハ日根野織部正守之松本城
ハ石川玄蕃頭是ヲ守ル旦又越前府ノ城主堀尾帯刀吉晴加
賀能登越中三國ノ主前田肥前守利長其弟孫四郎政利甲州
淺野彈正少弼長政其外東海道ノ城主悉ク城ヲ避テ
神君累世ノ舊臣等ヲメ是ヲ守ラシメ人質ヲ吉田小田原ニ
出ス是ニ依テ行路難ナク先騎後從雲霞ノ如シ村串與三左
衛門酒井作左衛門御旗奉行タリ安藤彦兵衛成瀬小吉米津
左衛門小栗又一

武林叢話

小栗又市人ヲ使ヒ曰勇士此戦死セスルモ一ツハ嘗ナキ為ク

色々食義ヲ尽ク戦場ニ臨ムハ討死ハセヌモノク唯己ノ勇
ヲ彰ハシテ古先ノ法語ヲ以テ邪心ニ軍シテ死ヲ遂
ルヲ先軍ニ出ハ己ノ為ニ為ルヲ為ルヲ毛利ノ人ヲ使ヒ
ヲ為ルヲ云ハ人ノ事ノ為ル先功ノ入ル戦辺
ヲ為ル兼ヲ為ルヲ為シテハ叶ヒ難シ人為ル大事ノ命ヲ思
ヒ知ル行ル為ク月日空ク送ルハ遺恨ナリ云々

武徳大成

牧野助右衛門山本新五左衛門横田甚右衛門初鹿傳右衛門
大久保助左衛門大塚平右衛門服部權大夫阿部八右衛門小
笠原治右衛門鈴木友之助山上郷右衛門加藤喜左衛門嶋田

治兵衛西尾藤兵衛保坂金右衛門真田隠岐守間宮左衛門中
澤主税小栗忠左衛門御使番タリ今夕神奈川ニ至リ給ヒ加
藤源太郎ヲ岐阜ニ遣シ御書ヲ福嶋正則池田輝政藤堂佐渡
守黒田甲斐守田中兵部少輔一柳監物等ニ賜ツテ先日ノ軍
功ヲ賞シ江戸發途ノ事ヲ告且諭ノ曰我父子ノ至ルヲ待テ
軍ヲ出スヘシ妄リニ兵ヲ出スヿ勿レト云ニ又使ヲ信州ニ
發シ御書ヲ真田伊豆守ニ賜テ西征ノ事ヲ告二日藤澤ノ驛
ニ着御三日小田原城ニ着御四日三嶋ノ驛田ノ驛ニ着御七
日中泉ノ驛ニ着御時ニ九鬼長門守守隆カ使者勢州畔乗ニ
於テ撃捕處ノ首ヲ持來ル御征伐最初ニ事初メヨシト御感
悦有テ守隆カ使者ヲ返シ給フ八日白須賀ノ驛ニ着御九日
岡崎城ニ着御十日熱田ノ驛ニ着御時ニ藤堂佐渡守参候ス
拜謁シ密旨ヲ羨テ赤坂ニ歸ル十一日清須ニ着御御不例小
倉宗哲御藥ヲ獻ス十二日清須ニ御滯坐猶御不例ト稱シ給
フテ　台德公ノ東山道ヨリ來リ會シ給フヲ待玉フ時
ニ藤堂佐渡守來テ云先北ノ河ヲ越來岐阜ニ至テ兵馬ヲ休
メ玉フヘシ　神君聽玉ハス此日市橋下総守長勝大垣
ノ城下馬瀬ノ陣ヲ襲フテ敵十四人ヲ撃其首ヲ福嶋正則カ

許ニ遣ス

感狀記

福嶋左衞門大夫正則尾州清須廿万石ヲ領ス關原ノ時
源君ニ從テ赴關東ニ大惡日ニ出陣ス其言ニ曰ク出テ二度
不帰家臣以之諫之事ノ急成ニ非ス出陣何ソ今日ニ可限ヤ
ト云正則聞テ然リ我本意實ニ二度帰ルヿナカラント欲ス
我所領少分ニシテ兵多カラス徒ニ人ノ尾ニ附ノミ於關東
拔武功大國ヲ賜リテ往ン若シ不然ハ剛敵ニ當リ堅陣ヲ衝
テ目ヲ驚ス戰死ヲ遂ン此二ノ者天運ニ可任ト云テ打立シ
シカ果ノ軍功他ニ異ナルヲ以テ安藝備後五十餘万石ニ封
セラル

翁物語

又義伊ヲ曰關ヶ原乱の时
家康公濃松の浦出馬の步行
ゆて関原ゆ度肝要の事と申さるゝ
関ヶ原へ出られて四日目に合戦を始られ
四日合戦ゆ成ハ大事なるゝ事ゆ細ハ此度上方の成敗
多
家康公に随ひ参上ゆ上方成ハ武器よ
ゆく同四日合戦ゆく成ハ同ゆ成ハいゆ成ハ後ゆ成ハんや
四日合戦あゝハ後の同ゆくて後ゆ成ハ
さまゝゆれハ
家康公ゆ成ハ後ゆ成ハ後ゆ成ハ合

我家ニ古傳利内及第九思召ヲ以てくゝ
古人物語
關ヶ原ノ時内藤四郎左衛門ハ少シ御不足有テ不参御出馬
ノ跡ニテ申ケルハ今度ハ石田ニハ中々御出馬ハ有間敷ト
思ヒ油断スヘシ左アル程ニ早速御出馬御座有カケニ御合
戦ヲ御始メ候ハ必ス勝利アルヘシ及延引ナラハ軍中ノ者
家康ノ御出馬候テモ別ニ替ルヿハナシト云ヘシ兎角早速
ナラハヨカラン也　神君ハ毎度御仕合能故ニ合戦サ
ヘナサルレハ必ス御勝ト御覺ヘ候処ニ味方原ニテ被成間
敷合戦ヲナサレ敗軍故ソレニ御懲被成候ト又御年被寄テ

御見合過ヘシ我等御供申タラハ必御勝ニ可仕モノヲ乍去
井伊兵部少ト云功者在故必定御勝ニテ有テント申サル此
外御手タテ御働ノ事ノサケスミ一々符合ノ由
武德大成
大友義統朝鮮ノ役敗軍ニ依テ大閤ノ譴ヲ蒙リ豊後國ヲ除
カレモ利煇元カ家ニ囚ル其後常州ニ配流セラレテ佐竹義
宣ニ倚頼ス然ル　神君ノ憐ミニ依テ去年京ニ帰リ本
能寺寓居ス其弟義乗ハ江戸ニ有テ宅地ヲ賜リ米邑ヲ食シ
此頃煇元カ勸ニ依テ豊後國ニ帰リ其徒黨ヲ催シ舊臣吉弘
統幸是ニ從フ

土方河内守雄久加賀國ニ至テ　神君ノ命ヲ傳ヘテ利
長ニ再ヒ軍ヲ起サシム時ニ利政二心ヲ抱テ能登國ニ入病
ト稱シ不出雄久能登ニ至テ利政ニ諭ス利政從ス雄久加賀
ニ帰リ利長ヲ勸テ金澤ヲ發シ小松ノ城ヲ圍ミ丹羽長重ト
相戰フ數月長重遂ニ利長ト和儀ヲ成テ蜜ニ使ヲ關東ニ
獻シ降服ヲ請フ是ニ依テ利長小松城ニ帰リ其後北莊ノ城
ヲ攻ム城主紀伊守ヲ勸メテ降伏セシム青木是ニ同シテ和
ヲ乞ヒ其子右衛門佐ヲメ利長ニ從ハシム　神君其赴
ヲ聞給ヒ御書ヲ雄久ニ授テ彌和平ノフヲハカラシム雄久

則御書ヲ利長ニ示メ長重及ヒ青木氏ヲメ堅ク誓約ナサシ
メ越前ヲ平ケテ濃州ニ入シム
嶋津義弘樂田ニ陣シテ曽根ノ壘ヲ攻ム松下石見守是ヲ守
リ戰ト云ヒ大兵防難ク井伊直政本多忠勝相議シメ水野六
左衛門（後ニ日向守ト改ム）勝成ヲメ是ヲ救ハシム嶋津又大兵ヲ起シ
テ是ヲ攻ム六左衛門大ニ擊敗ル其後嶋津カ兵再ヒ攻ルフ
能ハス松平丹波守康重モ　神君ノ命ニ依テ曽根ノ援
兵ヲナス
家忠日記
丹後國田邊城先日ヨリ逆徒ノ多勢是ヲ圍テ攻擊トイヘヒ

城主玄旨能拒キ守ノ故ニ城陷ラス然ル處ニ三條大納言勅命トメ田邊ニ來テ和儀ヲ嗳フ又德善院玄以カ名代トメ前田主膳正田邊ニ至テ和平ヲ結フ是ニ依テ和睦調テ九月十二日寄手ノ多勢囲ミヲ解テ田邊ヲ去ル玄旨先日籠城スルノ時戰死ヲ遂ントト欲スルノ間相傳ノ源氏物語及ヒ二十一代集ヲ

禁裏ニ獻シテ一首ノ和歌ヲ是ニ書添ル

古ヘモ今モカハラヌ世中ニ心ノタ子ヲ殘ス言ノ葉

武德大成

大友義統豊後ニ帰テ後吉弘氏ヲメ細川忠興カ家臣松井佐渡守

武家閑談

細川藤孝忠興父子松井佐渡守有吉頼母助ハ大別の長ク牛角代表者ナリ松井佐渡守事朝鮮ニ出ス武道一通ラス手習ハ我流道茶の湯無古ニ倣能在に武名ハ服ヲ為ルトシテ場數ハ有吉ハ二度多クハ出テ世ヲ捨テハ公儀多別ハ松井佐渡守ニハ有吉軍無ト云ヒ唯吉ハ有吉ハ武道平ラ其外ハ無法ナルヤウニ申キ

武德大成

カ守レル木築ノ城ヲ攻ム吉弘氏不克メ石垣原ニ陣ス黒田如水援兵ヲ率ヒ來テ松井ト共ニ石垣原ヲ攻ム義統敗レ走

ル其後義統又木築城ヲ攻ム松井防戈不能城ヲ出テ五百余騎ヲ率テ如水ニ加ル如水三千七百騎ヲ率ヒテ松井及竹中伊豆守ト共ニ義統ヲ攻ム義統遂ニ敗シテ吉弘氏等皆戰死ス如水使ヲ遣メ義統ニ説テ曰ク汝　内府ノ恩ヲ蒙テ旦義乘ヲメ關東ニ仕レムル時ハ何ソ逆徒ニ與セン早ク降服スヘシ我汝カ爲ニ　内府ニ請テ死罪ヲ許サン義統降リヌ如水是ヲ捕ヘテ豊前中津城ニ禁錮ス其後如水兵ヲ進テ安喜城ヲ攻熊谷氏カ妻子ヲ殺シヌ富來城ヲ攻落垣見氏カ留守ノ者ヲ殺メ筑後國ニ向ヒ加藤主計頭清正ト相約メ悉ク九州ヲ平ケント欲ス

景勝カ家臣直江山城守兼續兵ヲ山形ニ出シ最上義元カ家士江口氏カ守レル旗屋ノ砦ヲ攻首三百五十級ヲ獲テ會津ニ送ル景勝大ニ喜フ兼續兵ヲ進テ上山長谷堂ノ兩城ニ向フ義光防守ノ備ヲナシ嫡子義康ヲ遣メ援兵ヲ伊達政宗ニ請フ政宗兵ヲ山形ニ遣シテ是ヲ救フ此後數度相戰フ

天元實記

同廿六日は九月十三日なり　出羽陣より如屋見郡西成村亀甲山立改寺の住持大なる物と見えたる珠の外なる沛機師　[illegible]

[illegible]

中へ出府数〻[illegible]を御前[illegible]

[illegible]

安八郡[illegible]の[illegible]件の様と[illegible]

家忠日記

十三日　大神君岐阜ニ着御此所ヨリ土方勘兵衛尉ニ

御書ヲ賜ル

[illegible]

[illegible]

[illegible]

方[illegible]

今日十三日於岐阜[illegible]

[illegible]

九月十三日　家康

[illegible]

是ヨリ先キ　大神君御使トメ土方加州ニ至テ再ヒ利

長カ出勢ヲ相催スヲ時利長カ弟前田孫四郎利政虚病ヲ構

ヘ能州ニ引籠リテ利長ニ従ハス土方能州ニ往テ再三利政

ヲ諫ルト云ヒ利政曾テ聽ス是ニ依テ土方能州ヨリ帰ル既

ニメ利長土方ヲ携ヘテ金澤ヲ發ス丹羽五郎左衛門尉長重
大神君ノ麾下ニ屬シテ軍忠ヲ勵スヘキノ旨西尾藤右衛門
尉ヲ以テ和ヲ請フ利長是ヲ許メ小松梯ニ於テ來會シ和儀
相成利長進テ北ノ庄ニ到ル城主青木紀伊守城ヲ守テ拒ン
トス土方城ニ入テ諫ルニ依テ青木遂ニ和ス父ノ紀伊守ハ
重病タルニ依テ城ヲ出ルヿヲ得ス其子右衛門佐ヲメ利長
ニ從ヒ濃州ニ兵ヲ發セント約ス利長師ヲ帥テ濃州ニ赴ク

此日　台德院殿御書ヲ遠藤左馬助ニ賜ル

飛札令披見候、其元之儀金森出雲守ニ相談候去朔日
郡上へ相働稲葉右京居城八幡へ取掛外曲輪悉被
押破数多被討取其上種々懇望申ニ付人質を取之
免之事其上者一段之儀ニ候然者父右衛門佐申談可然儀
候、右者其表仕置申付候中付而上原信州下向
謂ニ着陣候條、猶其表可申候條也

九月十三日　　秀忠

遠藤左馬助殿

大谷刑部少輔吉継北國表ノ制法ヲ定メ近辺ニ威ヲ振フ処
ニ毛利輝元ニ相議スヘキ吏有テ手勢少々引率テ北國ヲ發

メ引田ニ到ル處ニ石田小西嶋津カ許ヨリ脚力來テ告テ曰
ク東國勢岐阜ノ城下ニ放火シテ呂久ノ渡リヲ打越シ赤坂
ニ進テ虛空藏山ニ屯ス急キ北國勢ヲ相催シ中ノ河内ヨリ
關ヶ原ニ發向スヘシト云云
大谷聞之テ賀州ヘ檄ヲ飛メ北國勢ヲ待揃ヘ關ヶ原ニ馳上
ル大谷吉継ニ從フ軍勢大谷大學助吉介（吉継カ嫡子）京極宰相高
次木下山城守頼継脇坂中務大輔其子脇坂淡路守小川土佐
守同姓左馬助戸田武藏守同姓外記朽木河内守赤座九兵衛
尉等一万五千余騎九月朔日越前ノ敦賀ヲ發シテ關ヶ原ニ
至ル四國九州畿内ノ軍勢等大谷カ陣ニ馳加ル又勢州ニ發
向スルノ逆徒等安野々津ノ城ヲ陷シテ後勢州ヨリ軍ヲ返
シテ關ヶ原ニ出張ス是ニ依テ關ヶ原山中ノ四方逆徒ノ軍
勢尺地モ十ク充滿ス
大谷吉継（明良洪範）刑部平貞盛ノ孫大谷仲記盛胤カ末葉也盛胤ハ平
治ノ乱ニ中宮新朝長ヲ射タリシ男故則美濃ニテ領知給ヒ
シ治承年中源家ノ起ル時ハ筑紫安樂寺ニ住居メ其子ノ盛
方以來大友家ニ仕ヘテ數十代刑部ニ至テ秀吉公ニ仕ヘテ
五万石ヲ領ス關ヶ原ノ時石田ト分テ心安キ譯有ニ付三成

ニ再三諫言ストイヘ𪜈三成不用依之一味利ナキ支ヲ察シ
最初ヨリ討死ノ覺悟ニテ出陣スト云秀秋逆意ノ沙汰ヲ聞
テ家臣ニ下知ノ曰兼テカクアルヘシト思フ處ナリ脇坂カ
旗色ヲミテ注進スヘシ脇坂モ裏切ノ色見ヘハ人手ニハ掛
ルヘシクソトテ吉継甲ヲ取テ手綱ヲ木ニ繫キ不退ノ心ヲ
諸卒ニ示シ湯淺五助ニ首ヲ切テ泥中ニ埋メヨト下知馬上
ニ自害ス智勇有テ軍旅ニモ賢キ人也嫡男大學頭吉勝木下
山城守頼継トモニ討死セント志ス処ニ橋本久太郎強テ留
ル敦賀ニ帰リ来テ殘兵ヲ催ストテ𪜈應スル者少キ故大谷

ノ城ニ入

家忠日記

京極宰相高次一旦偽リ謀テ三成ニ屬シ大谷吉継ニ從テ北
國表ニ發向ス吉継兵ヲ率テ北國ヨリ馳帰ルノ間高次モ是
ト共ニ北國ヲ發シテ關ケ原ニ赴ク高次元來　大神君
ニ志ヲ通シ軍忠ヲ勵ント欲ノ間熊ト諸卒ニ後レテ江州東
ノ野ヨリ大津ノ城ニ帰リ入テ旗ヲ揚ル敵寄來ラハ是ヲ遠
ク見テ拒ン爲ニ大津松本關寺近邊ノ民屋一宇モ殘サス焼
拂ヒ立花左近將監逆徒ニ與シテ勢田ノ城ニ在リ此由ヲ聞
テ醍醐路ヲ經テ飛使ヲ大坂ノ城ニ發ノ高次　大神君

ニ屬メ大津ノ城ニ楯籠リテ近辺ニ放火シ武威ヲ震フノ由
急ヲ告ル三成是ヲ聞テ事延引ニ及ハヽ東兵ト戰ハン時其
障ト成ヘシ速ニ是ヲ退治スヘシト議メモ利七郎兵衛尉元
康ヲ部將トメ杉若越前守荒木平大夫多賀出雲守宮部兵部
少輔柳川侍從等四國中國ノ兵三万余騎大津ノ城ヲ圍テ是
ヲ攻擊シム城兵堅ク守テ拒キ戰フ寄手戰フ毎ニ軍利ヲ失
フ然リト云ヒ此城艮ノ方計リ湖水ニシテ要害ナリ三方ハ
陸地ニ續テ關寺ノ麓三井寺ノ辺ハ山高フシテ城中ヲ目ノ
下ニ見ヲロシ其間僅ニ四五町ニハ過ス寄手ノ軍勢山ニ登
テ火炮ヲ城ニ放テ入ル湖水ニハ近江一國ノ船ヲ揃テ松代
ヲ組テ攻寄ル陸地ニハ又搔楯ヲ並テ多勢彩シク攻擊ノ閧
遂ニ城ノ出丸ヲ攻破ラレテ既ニ寄手大手ノ門ニ攻入ント
ス城兵袖井小左衛門尉門ヲ閉テ堅ク守ル多賀越中守赤尾
伊豆守外郭ニ進テ奮戰ヒ敵ニ其間ヲ遮ラレ爲方ナク濱手
ニ廻リ必死ヲ遁レテ城中ニ馳入ル寄手ノ軍勢松浦伊豆守
ヲ始メ死亡ノ者十余輩其疵ヲ被リ命ヲ殞ス者一千余人ニ
及フ然リトイヘ𪜈寄手ノ猛勢是ニ擬議セス城ヲ競ヒ攻ル
ヿ甚急也東國ノ實否ハ未タ知ス城兵殆力盡ル

慶長五年秀頼の為國として村上義豊等を率ひ
九月十二日の晩常陸へ安房十三日早天関ヶ原中より安
國寺に對面し村上らの陣所の物味方の旗を立
てと云安西寺我と方張ふ為なり敬寺人ふ味方十人の
事なれば男女日持ちくは味方の物よりて村上方の
く味方山と云ふ安部弾ふ山なるく上り伐まくにうそく
の紙なるしめ付なるくと山上より陣せしめ早速伐くと
下して戦ふるなへうたれ東國方ハ武功の方達成
ふ少勢なれども伐寄し高上一五日の内ふ戦を持て以て
敵ふ可ふと諸先て功しう果して此上勝負定
まる此時関東うと思田家老後義又高ハ味方九勝ふ向
て南宮山へ移せより押上てるハ必定敬ふて方も毛利勝為
し朝鮮ふて数年一ふ軍して覚くうう彼家ハ山なるくふ
為ふと思ひ風成為ふ中ふ為多中書ハ中く遅と諸て
戦へ敬ふあるて為ふより会く戦事敬ふき陣ふの
中考ふ中書ハ向備村上後義ふ中如敬ふゆくあるふ

家忠日記

十四日大津ノ城兵遂ニ和ヲ乞ヒ城ヲ避テ開渡シ城主高次
大和路ニ走近國ニ志ヲ通ル味方十クシテ殊ニ要害堅固十

ラサル城ニ敵ノ多勢ニ圍レ數日是ヲ守リ拒クヿ最モ武勇
ノ將タリ然リト云ヘ𪜈今一日城ニ在テ拒キ守ラハ翌十五
日關ケ原ノ逆徒等悉ク敗北スルノ聞寄チ𪜈軍勢此告聞ハ
圍ミヲ解テ退散スヘシ然ルニ於テハ無雙ノ武功タルヘキ
ヲ今日城ヲ避渡スヿ城外ニ内應ノ者ナキニ依テ也
天元實記
扨亦十四日彼地在陣の諸大將何とも思ひ寄りを古連呂久
の川を越て淨連のしゐ所を責出ひとく其也川水地立高潮
ゆゑ責出の如き事可有ハ何方よ在陣と淨蓮寺ハ
秋氣ハ井伊出羽守多忠勝其人ハ國みく敵方押の為
夢根村ゟ在陣仕出羽守上ゟ夢根ハ大切の場所ゆ
ゑ其ハ方の事ハ諸ものハ人まゝ古樣と云立て二方の間
ゟも出来ぬ事ハ為ゟ淨蓮寺能大勢の人まゝ掛ル
とみ方ゟとゝ中ハ中ハ城ゟ中ハ城ゟ中ハ城ゟ
出逆谷ゟ中上ゟ夢根ハ方用ゆ事ハ方後
夢根村ゟ在陣仕ふと御ゟ是れハ六萬石中上ゟハ
家來井伊ゟ多人夢根在陣ハ義ゟ事ハ也
淨蓮寺ハ出羽ゟ陣ゟハ動ハ中ゟ相對中ゟ義ゟ
秋氣ハ品人ゟ淨蓮寺へ出ハ一戦の別淨蓮先に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古人物語
神君赤坂へ御着ノ時大名衆皆々御迎ニ出柳生但馬守モ早々在所ヲ出ケレ共九鬼ニ押テ御迎ニ道迄ハナラス赤坂ヘ出向フソコニテ　神君御駕籠ノ内ヨリ南宮山ヘツヽキタル山上ノ敵ヲ御覽被成御駕籠カタムク程御グレヲ傾ケ御覽御駕籠ヨリミヘヌ方ニ大名衆アリタルヲ柳生進ミ出テ御上リ目出度ト申上何レモ是ニ在ト云リソコニテ被仰ケルハ各能被出候太儀ニ思召サテ明日ハ早々八幡ニカケテ合戰ヲ始ヘシ必定御勝ト御意也

天元實記
九月十四日　内府公毒殺ス

[illegible]

より四郎町四郎兵衛尉の方へ陣替仕候岡山表後
の方より清兵衛尉元長陣を立申候と御覧候ハ
堀平より右田弾蔵殿迄蒲生備中守家
より明石掃部助殿多賀谷豊後守殿
横瀬川を渡り城郭人数中分刈田を殺し
村一揆陣取家数ハ如申上刈田の節を儀と申
沙汰仕候者共者毛の棒の長物にて走廻り
右田弾蔵殿と共に中村の御ハ二人と捨身に成
南の方へ出張仕候て中村の御ハ

と池内蔵尉殿一足頼母敷迄も押懸御ハ而
三成り後年ハ小西摂津守殿伊藤新兵衛
中と申と初め五百人斗と深田家来まて小川掃部
助殿多賀谷豊後守殿と初め八百余の
と申と為り右田弾蔵殿深長鴻殿迄蒲生備中守殿
歩戸一足村の数陣を仕候と申中村の
と申と右田弾蔵殿刈田の殿を囲と見へ候と
の近所と追立候ハ進み行候ハ一足村の御衆
一度に鉄砲を打掛候ハ百人余り祝

ゆゝに捨てんゝ家を焼き、
さて彩雲と云ふ山中村の勢、俄に
討死と遂ぬ、山中村の勢、行くは迫立川
頼母い金の二幣の指物にて、名毛の赤い馬に乗り川
の東より押立駆寄の味方と制し、新母衣を打ち
の振合物ゝ見苦敷ひと大音揚に如く田仮の藪
内迫退事と見ゝ新母衣を手ゆは何として川退事
ゆと詞を掛まん内迫指向て我先と負の藪
川退ひと中捨て川と西へ馳ひとゝ新母衣ハ指も踏留り自

身を捨てを以て御働ハ如石田の家来海老市郎と申者の指物
陣地の高り馬より落ひて組下の侍松村伝助立寄新母衣の兜鉢
と肩より付進ん人と成り如ゝ石田の者共り市ゝ申ゝ新母衣の奥
足の上帯を切り服部平と云川退ひて石田の者共地一反の
貫と云ひゝ中村の下人中村彩助河毛彩八郎中村の
八人成討死中村の一人既に敵ハ成すと云ゝ陣所無ひ
有馬玄蕃の者も数十人地出ひ中にも稲次右近名毛の半月
指物にて出ん進んて川と雷渡し向の岸ゝ地上りひ如ゝ全
の制札の所立物と成し横山豊前と名乗ゝ稲次と撰人名毛

馬より下りて殺し、双方馬より下りて組付とする横山賢
物と指次と組伏くよへ家をを如く太迫ら美堂地角て横山ら
奥足の綿篇とをて引返し山ゟ太迫下りら引返し家をて
首とかんと殺しらる処ゟ横山ら下人池者て太をら甲の銀をを
家へ又太迫ら美堂地角一刀切付ゟ殺と殺し刀と接切合
うちゟ太迫ハ横山ら首ととりく立上り件の賢物ら美堂
とも切殺しその首とハ馬の鞍ゟゆハ角横山ら首とハ馬上
ゟ先自角市蔵申へ指条仕とをり山ら有馬家中の者共
追く地角ら申へ中村ら多の者ども力と為一所ゟ集りい処ゟ田

中ら郷ら見れ者ども中村ゟ助け参りい故ゟ体方
智ハ浦くゟ大頃智と合ひて　田府公岡山の御
和津ら庄境指をされ源兵ハ大手ら引場ら也
め連ゟ中ら仰ゟ角源兵ハ金の鞍の指物をて川と成ら
中村育馬ら多の者共の中くるとを入いろくゟ切殺しら
ゟ中くゟ地角ら仰をて出をくひゟ角を〇く井伊亜
政和多内紀右衛とをくゟ源くゟ引をせら紙ゟを仕
仰角ゟ人兵紙殺ゟ切ゟ角歌味方物ゟ仕ゟを亜政ゟ知
して引ををゟ兵殺ゟををり

右一戦の始末世上流布の巡覧書面ものも荒増のもの
もきハ若干の巡一戦ものの結構仕様を書付ける
武功實録
關ケ原陣ノキサミ有馬玄蕃頭ト嶋左近川ヲヘタテヽ對ス
左近ニクイトメラレ玄蕃頭引取カ子タルヲ御覧セラレア
レ引取ラセヨト本多中書ヲ被仰付中書スナハチ馳参テ敵
カ出シヤハリテ見苦敷候追込メヨト御意ナリト云味方勇
ミ勵ミテ敵ヲ追込ソノ圖ニ味方ヲ引トラセタリ
天元實記
十月日豊州須　内府公清正陣所ニ大垣城中
右之通ものもの先ものの所ものどもあ陣容ものの
ものの大垣城中ものものの逆徒方の結構家令評議の完
中ものて　内府公清正陣ものものものて直ものと
中ものもものもの迫ものの内府公清正陣ものの先ものの結軍陣所
ものの者刈田中分を警固ものて人数ものものの事の術ものの
ものものものものものハ大成ものものものものの者ものもの
清正陣ものの義ものものの清田家ものハ明石掃部中多對
馬石田方ものものの清正迎蒲生侍中ものの人ものの陣ものて
ものものものもの

中村与兵衛大垣藩士引渡を追うけ株橋川を渡り
城内へ　　内府公清兵衛川切り迫間はふ渡りて
清兵衛に対面の後追返されしと出発に臨み兵衛
あまたの人々清兵衛に対面の後追返されしと出発に臨み兵衛
稲次右近様山賀物ふ組伝ふ節　様山と門例して
主人ふ高名なる技に右近様差置と味方に技して
首を取て立去る者有り右近様の方にて
有りしと聞き伝へ馬の口取の中間中は何方にや
無疑と思ふる侍と中間右近様に腹立技なり

清兵衛へ手紙付ル首二ツ差上ル様に出国に別首帳に
附に加物なり先ふ首持参の人有り然る所に
場尾伝兵衛殿無疑の流首を持参る技なる中にて
いと有りし日右近様に首と中は私の差置の首に
て此味方に組と云ふ内様面と唯今内用
先ふ私ふ中ふ様に首帳附役人同く長兵衛
と有り帳面と右ふ技事ハふ私ふ事ふ
同答仕と　　内府公様に出何と中と内用
首帳役人右近様上ふ様に技出西の軍出

は去年の春も度々は武州へ通ひて度々指図の作に
て有之候なり然るに一戦以後去る二月迄有之候
内家中にて無数の所と中仲ヶ間十人賞し中取残九
人の同役とも中会敵味方共見さらいも無之候の者
とその通りにて出来申候何とも無数にて去上ケ
出し申候信濃守殿如親父帯刀殿同じく
甚だ無数にては去上ケ加増と呉り候の見極三十人
計先年氏の年寄ひとすり稲次兵庫殿方へ参り
言葉氏殿の加増と呉く家老職にて付長倉仕賞永

年中肥前国有馬源六郎義貞右利当丹波成敗の武八
十六家にて討死仕候由為追付家老職迄監物殿ものい蒲
生備中殿家老の由なり
并伊直政へ味方の人数と引揚させ申候にて伊丹
の別手に多八郎〻郷の羽織と見え候金花縄面の小馬印と
馬の傍に引付兵部殿と申振り敵味方入乱申候中に
家人〻〻殿下知中村有馬田中三家の人数と引揃
九月五日の朝たく〻見事成振よふ有〻〻〻
中多忠朝八中村与〻〻何とて出来る御と仕て

早川上に拔き大聲を揚て下知を成り如く中村家中
を率て進林文吉と中村初め新兵衛
以下とは我先にと人馬に付せ乘馬の者も
と中知に拔ふと中拔て大砲響と迫立の仕形と也
設さん所く初合戦の別中村方先者多く討死
既に川を渡り退る者と見て取り中村為人數の
跡追て来るとは大勢人の働申の者ども
に拔懸ん中一戦の後立直て出る為人中合返言
中りは人々皆安心思召て出る者の後に乘て来る

始も主人一家知ずこの見届し乘て拔出る
安堵中切て取る乘て中村代人の参者の仕様迄の
義沙汰なしと
大一戦に別出頭響の中にて白志賀の物仕る
この家度と中似も形く跡追り取て川退し
吉振合沙汰出と岡山より　内府公出陣あれ
白志賀の振合と見るやと出例所人伊勢義及度し
とて外志賀人白志大物仕る義者志の白志賀
同前の出御の者者こんら渡り出り為人の為出せし白

志賀人は林半助と申し石田与家にて使番役の者
殘る者人は淺香庄兵衛と申し兵ハ本村伊勢守方
にて男子性相勤十六歳の時分より氏郎行と云奥
州より帰て伊勢守一揆よ云まりまして及鎮圧の節
大阪の働をなし者共本村為上野以後石田方
一味浪人ゆゑの命歎願仕候一番に加
と云成機嫌を伺ひ居る紹の段の羽織を着し
張の大打出為立物にて本働中村家人梅田大蔵
と申者の負て迫兵庫と実伏その首と立帰る
大坂の角矢倉に上たに秀家云成上り居る前にて
水野庄兵衛と云申し世勇氏郎出先にて
此と申し者共の上より云成云名と見て庵
勇氣ハ先一中宮豊形なり先自分人数を門
場に形ちの如新左衛門と者と庄兵衛ハ梅田与蔵と
は美濃ゆる特出し者ハ今義場人云ふ林半助
と同じく廣と特し人数を門とせ申と関ヶ原
一戦以後淺香庄馬助と改名し加州利長に
呼出され石田方に居る内は水野庄兵衛と名乗

いとまする

古人物語
九月十四日大垣表ノセリ合ヲ　神君屋根ノ上ヘ戸板
ヲハシニ被成御上リ御覧其時御湯漬ヲ上ル本御膳ハセリ
合ニ御覽シ入御服ノ上ヘアガリコボスト也味方ノ喰留ラ
レタルヲ御覽シテ本多中務少ヲ被遣又井伊兵部少ヲモ被
仰付中務少揚テ帰ル明日ノ合戦ニ小セリ合ニ歴々ハ被遣
間敷ト也

天元實記
たゝ一戦ヲ遂て後酒宴迄と明石掃部殿人間迄よ
て秀家之陣ヲ上て居る先人衆一戦の次第を

御ら命秀家ゟ申ハ
ふに者ゝ小ハ世表一戦の義をはいたしゟと毎人ゟ申
ハ申ハ鴻古迄明石掃部一同ゟ参ゟて思のゝと
ゟ戦敗陣の様子ゟ何ハ申
小ゟ陣ハゟゝきハゟ紛ゟ敵ゟの陣ゟ付ゟる
後ゟ其ハ申ハ
内府無年の法後ゝとゟに
陣後の一戦ゟと後ゟ申ハ皆ゟ一夜陣の様ゟ
中ハ後ゟ移ゟゟ者ゟ見ゟ中ハ申ハ世表一戦ゟ者ゟ唯
明日ゟ戦中ゟ様ゟに南宮山ゟ陣ゟ申ハ

候毛利宰相殿松尾山ニ陣入候中納言殿陣所ともに
陣場ヘ〇相成候而兵庫頭殿ニ者関東表之御一戦
ニ極め候テ相済候ニ付被存候両陣ヘ申遣候得ハ・内府公より
押勢ニ被差向候筈ニ候得共関ヶ原へ急ニ御出馬の成兼
候義も可有之候哉然ル所唯今ニ而内府御勢者相調候間御出張ニ候ハヽ
中納言秀家三成ともに惣人数ニ而中所ニ一理有之候由ニ候
ニ而権現様より兼ケ申ニ付候得共兼而被仰付候趣ニ候と
右之次第ニ候所ニ相成候上関ヶ原表へ打出候様評議決
而陣場ともに桃灯明松等ヲ以ともし候て出止栗原山の

毎ニと用意不致ニ候段ニ付ニ納得之事三成も出陣ニ付
小山江ハ之備り候得ニ嶋津中将並同苗兵庫頭方
より急ニ申入候義有之候所ニ付同苗兵庫頭方の儀ニ付兵庫
候由日上之月三成対面ニ而申候処兵庫頭中ニ付今度当城
より関ヶ原表へ可打出候様之儀ニ付得と承候処被相知
候所之様兵庫頭被存候得者両陣ニ而有合候人数を以今
宵夜中ニ　内府公の陣場へ夜軍ニ仕懸ケ候ハヽ
内府公ニ而ハ兼而江戸先手として此度ニ付而ハ御着ニ付而ハ秀
家ヶ申段ヶ所々惣人数ニ而関ヶ原へ出陣　彼地の決戦

繁とん　　内府の先手へ外様理兵衛ハ切崩ひ
中へ会て敵ひ為手負申候中達ひ申ハ三成ハ御高恵
ニ御ふ見へ（ひめ）ニ為出て中ひ中ニ毛摩所殿ハ敵
毎度思召ハひ為ハ古来より夜付夜軍なる中
敵ハ小勢の方より大軍ひ対し仕候て勝利と為ひ
例ハ為ハ為ハ大軍ニ小勢ひ対し仕候ハ例ハ為
初ハ仕ハ明日ハ平場ニ於て一戦ニ及ひ
ハ味方大勝利ニ新ひ申ハ為ハ安心ニ存事ニ
毛摩所殿ハ作達ハ為ハ久ニ存て　　内府の押付

を見申て下ニ成ハ三成ハ中ハ味
今ハ迫ハ中通ハ味方の勝利ニハ眼前ニ御ふ
ハ為ハ毛摩所殿ハ事ハ大事ニ存て作ハ
ハ敵ハ毛摩ニ成ハ為ハ敵毛摩ハ作達ハ申達ハ
ハ申ハ敵ハ中ハ毛摩ハ中ハ迫ハ為ハ為ハ
ハ思ハ為ハ為ハ為ハ元ハ　　内府の押
付ハ為ハ為ハ何方ハ何ハ何方ハ事ハ為ハ為ハ
ハ為ハ迫ハ中ハ敵ハ先年ハ為ハ為ハ毛摩ハ
ハ為ハ為ハ如ハ為ハ一ハ為ハ　　内府ハ

掛川の城を開き井伊兵部少輔直政を迎ひ取り申候
内府の押付と云ふ事を中納言方迄よ申聞まい下
方の仰せ物を受け来り申候ものなれば其命の　内府
と唯今共　内府と同じ事に成り申候ハ大きなる相
違の儀に候間一統に別　内府の押付と云ふ儀
を捨てにが命じ候儀なるべ庭と立中納言ハ兵部少輔
方共一説関ヶ原記家忠日記等の書面を以て考へ
申し候ても徳川方の助勢と申して形る中そ
こ偏に方家徳川関係方面へ報伝仕り上先年
鳴海帯刀八郎宗命を命じ出陣仕る毎回の儀
に不義なる関ヶ原出一戦の前夜に庫裏中納言
様と為る　家康公御出陣の夜付て仕りの為
寧者に方面家ふ御ありても中伝へ仕りの儀に付
家に書面申し

武徳大成

三成宇喜田秀家小西行長長束正家大谷吉継安國寺恵瓊ト
連署ノ瀧川豊前矢田半左衛門ヲ松尾山ニ遣シテ秀秋ノ家
老稲葉佐渡守正成平岡石見守頼勝ニ憑テ秀秋ニ告テ曰秀

頼十四五歳ニ至テサル間ハ秀秋ヲ關白トシ天下ノ丁ヲ總
シム筑前筑後ニ播磨ノ國ヲ加ヘテ其領知トナスヘシ且正
成頼勝ニ黄金三百枚ヲ授ケ相約スラク此役戰勝ハ近江國
ニ於テ各ヘ十万石ヲ授ント誓ニ神明ヲ以テス正成頼勝即
秀秋ニ告秀秋佯テ使者ニ答テ云ク素ヨリ二心ナシ豈異心
ヲ挾ンヤト云云

十四日ノ夜三成以爲

神君ノ陣營甚近シ大垣ノ地出
馬ニヨロシカラス則諸將ト議ノ陣ヲ佐和山ノ外郭ニ移シ
戰爭ノ時南宮山ノ兵士ヲシテ横ニ擊シメントス即福原右
馬助相良宮内少輔高橋右近秋月長門守熊谷内藏允木村宇
右衞門垣見和泉守五千騎ヲノ大垣城ヲ守シメテ秀家行長
義弘及安國寺ト二万余騎ヲ率ヒ城ヲ退テ不破關ケ原ニ向
ヒ伊吹山ニ背テ陣ヲ南北二十余町ニ張ル其陣ヲ移スノ間
前後驚騷シテ殆ト敗軍ノ兆アリ且途中雨ニ遇テ從軍皆疲
ル三成秀家行長安國寺戸田武藏守ヲ率テ其後ニアリ伊藤
丹後ハ黄母衣衆ヲ率テ其次ニ在筑前中納言秀秋ハ松ノ尾
山ニ陣シテ三成カ陣ノ南ニ當ル脇坂安治朽木元綱小川氏
其麓ニアリ嶋津義弘ハ關ケ原ノ南ノ小山ニ陣シ長束政家

ハ毛利秀元及吉川廣家ト南宮山ニ陣ス　神君福嶋正
則ヲ先鋒トシ御四男松平下野守忠吉井伊直政本多忠勝カ
軍ヲ相加ヘラル各青野原ノ北ニ陣ス黒田長政細川忠興加
藤嘉明淺野幸長其後ニアリ池田輝政田中長正堀尾忠氏山
内一豊有馬豊氏垂井赤坂ノ間ニ陣ス其餘藤堂高虎等ノ諸
將岡山ノ御館ヲ嚴重ニ相守ル

天元實記

十四日夜ニ入ル時分雨降出テ夜明ルモ是
元ヲ〇弾ニ打田ヲ取シ時分大垣より門出
ル軍勢ども我勝ニ成ル

ニ成リ曉方ニ成リ雨は空は晴ルへとも朝霧深く物
カ見ヘス成ル一戰始リ成ル時は敵味方共ニ
多クの鉄砲中網之秀秋の家中は一同に合戦馬
きんの指物朝日に輝き松尾山と合色に輝る
ことく出ル候と有成と小本多忠勝物見仕

家忠日記

石田治部少輔嶋津兵庫頭關ノ藤川ヲ越テ小關ノ巽ニ向テ
陣ス備前中納言及ヒ小西攝津守石原峠ヲ下リテ谷ノ小川
ヲ渉リ關ヶ原北ノ野表ニ軍ヲ出シテ西北ノ山ヲ背ニ當テ

是モ又辰巳ニ向テ屯ス

大谷刑部少輔平塚因幡守ハ關ノ藤川ヲ前ニ當テ岸ヨリ下ニ陣ス朝霧暗ノ敵味方ノ陣分明ナラス

天元實記

十六日関ヶ原市一戦の次第の覚書

名付し書物数通ともみなく其外家忠日記材誠道伴の覚書石谷出入共の学士物として其時代の書と書し四冊ともと見合ひるに大体ともに同じ様に有しかも完遂しは多かしこに相見申し其見出虚実に依て分明なるそれ今時を以ては彼の他西軍録よりて又も比類なき稀書なりしかと中納言中納言も同じく有し様に思ひるもまたをきけるの他出ずして其時代の西軍録と申すものハ全に出来し物にて一度二度の小迫合〻事と書留し覚出物のハ委細なる事留もうなしひるも関原表の内一戦とは有しかは天下分目の内合戦にて日和に於て古今例しなき大合戦と申す上只二時半の内より変かしこに於て同時より鎬ひ始りしを程なく逆徒方は敗軍致し関東方の内勝利と成りしを後まで法華宗の合戦の次第と世有て事明

見届候間敢て書留置申候ては無之候へ共何
出の書とても後人の徴に為なるべき事なれ
ばとて唐代時代の書を蒐集致し候可申候へ
ども為其為に今長住する外無之事に候
とは其場所へ立さるうち者に為る事に
も我朱為〇〇師も為度大坂陣よりあつて
きり出りかくしうと中者は余多有之候間
敢陣中立中と中者の中人より申
出会所に場てや呂人今ばかり八百年年よりあ
ばかりよりあ

十分迷惑方毛利輝元相秀元と為る者門以下毛
利家の軍勢南宮山へ立登て陣と張と云も兼て
関東へ出一味する様に成て既に今戦始りとなる甲
と云たる武士とて小者人も無数長屋も第千法施
と面くの前に立て蔵の物と乱分致して取仕なる
御当主小梅は別に紙に綴と申所に侍へ

居る長束長曽我部安國寺始め毛利家
の表切と氣をもみ年まて雇兵門関ヶ原表の一戦上方
際に負と成て諸の手紙を立伊勢山の方人なるを
の弾と思ひ〳〵安國寺人数を豊臣兼
迎ひ下りしと思ふ〳〵四国水路も同じく敗走仕り帰る
の旨を迎ひ仕前の方面も多と討死忠義を仕
先祖元就以来の所領を敵に奪ひ取られ
迎に強念する仕合に成て毛利家譜代
のものも悔いる兼重勘九郎物語

十四日に夜半過に成て福島正則初め江法寺と中ものと
為使を以て家康は逆流方に向ふ夜半大坂の城中と
引揚ひ翌日海道を除て関ヶ原表へ出張仕り明朝早天
より一戦と聞く切最中にて可有之早く出馬と
家〳〵に申聞せられ法華院様へ以来より少数ものの為
別陣前へ出て迫付出馬と出合申上陽院
様へ上申受仕り天正年中長久寺表に於て
明繁秀吉のもの一戦と申山城戸元中山城中へ出新
法を経秀吉方に大軍と迫来て上を作り

清水馬を経て出て清馬に至る西に北に清水川戸流れ甲
州と上野を境いとなす信濃国北国
道を下て信州と上野を分る所を「御馬を経て」
南宮山小陣を置く逆徒の主将たる毛利秀元は既に
伯耆を経て南進の人質を出すを約束して
牧も出陣の為を上長曽我部長宗安国寺
八幡二氏を西方に送て押の為と為て減兵を
与え幸長小山内野馬を首馬清水徳長清水田馬
を合戦清水一柳監物市橋下総守松平右衛
清樹井伊織部等を西に送て徒大垣の郭を
福原右馬助伯耆守に備へ
は熊谷内蔵助垣見和泉守森
家を置つ父子三人相良左兵衛佐秋月長門守
小勢人数七千余を率て合戦場に於て城中に
は福原中務丞兵部少輔は合戦場に働きて
の中合戦も如何大垣の城押として西尾隼人正水
野右衛門佐平井摂津守を伯耆守に奥州清水右衛門
長谷川藤兵衛も大垣の人数の内に出て水野云
長谷川国と清水と国山清水所の出張を城

尾張守と称し
所々の人々同大名流の使ひ人に同名流と云人宛
を呼寄せ秋の月見の為に検使に参る者
為に
酒と称し秋の如く秀秋表切の式迄行方大谷平塚戸
田の家来共も随分に能給物毎度に迫立ると
見えて為に為に自然捨て敵と寄立服を
飾り見て迫立て下知に従ひ従ひ討死を遂げ
或は降を進り一度に敵に取囲まれ降参仕
有思召に如徳川殿に参の為と有之

江州の関ヶ原三百五十地と称し
十四日に晴方長束安国寺毎人を大頃の時より南
宮山へ向り進に毎利宰相秀元の陣へ来り秀元
へ申に於大垣秀家の中に秀元の内事我等共
毎人と結南山を降て徳川方に内通夜中に
と相乗さま明朝先日一戦始り候
徳川へ掛て一戦あり毎に世評然ども下人の如
宰我々毎人秀元の中進ると時に秀元毎人に向
以手は神妙者に差寄ると雖秀元為名代

はせ参へ出陣致しかたは秀家と同しく法陣の義に
ともふ致してハ為ん後なると秀家の義を信一義に
可及やうハ無之と申なく作中に有之人ハ例之在
在吉川方へ向ひ宰相殿何の通りの作法なるとハ
てハ義理なる会義為の後ハ軍の事も遠ハ
中後なるハ早意見秀頼公の御為ものを曲
為て出仕申されなる者も体中上一致となり
吉川殿とあへて安国寺ハ秀家中絶ん迄
と絶義なるハ関係有之ハ秀元後ハ為

為勝れ人とも為意見秀元ハ秀家の下知と信ハ
如何成所なるハ苦敷ハ且て事度一ハ此迄
ハとも為人産と立く内の物ハ秀元ハ吉川殿
為会関ハ人一体ハ致ハるとも為人とハ致ハ
ハ方ハ兼帝勘入申物語ハ
為為中納言秀秋ハ見ハの撰攻の事ハ逆徒一味
致ハ豊州あの体ハ責の列秀秋ハ為
ハ致毛利家の法軍豊ハ一列の作ハ有
ハ義陽長束大蔵ハ人の事ハ有ハ有秀

秋以下の知行と申し候て林信濃平岡石見守
家老共に仰せ渡され逆徒方一味と申し候て氣
の毒なる事に存じ在所を幸の事と存じ秀秋
と迫り申し秀秋を病氣と申して贈物より引返
し江州高宮の澤に宿陣石田三成宇治
にて秀家大谷吉継両人に従い大谷吉継ハ此方
と存じ我手の中にて大事の前の小事ハ捷を急ぐと申
古来より申伝へ如ク今秀ハ家康方に有ハ者共沈
没の成と申家物語なる事なれ共中々元方
と申し表へ出馬可申と毛利秀元と家中の人数中
と陣の内にハ其内自身ハ二番に控る上ハ中納言
秀秋と以て事の主と存じて惣軍の指引を
と申候て秀元ハ不平の如同に奉行職と中
なり秀元も出馬の用意して指列に細と以成立る
大義なる事と存じ候ハ秀秋ハ
所存ハ家と有き隆家以来代々の家来の分の段
してハ法度可被仰付事ハ其身の器量
と申義年と考ハ今以存ても一万

に及ぶ大事とこそ 殊更隆景 仕置之家来とも
数輩 罷在候なれ共 深く秀秋が身に拵り候て
は大きなる味方の邪魔と申ものなれは 御退き
とも只今に至り女人よりも鬼や角と申越候て
はや何にても有之 某方より存寄の一通り申遣し候て
いや何と有し [illegible]女人と一所に居られ候まで大谷
方平塚 同故戸田武蔵女人と相談致し上秀秋
仮にも此度の儀如斯ものと申遣はし 平塚戸田等
定て罷越 秀秋 高綱へ見舞申候 面談にて入度候なとし

[illegible]女人罷越候中入候処無拾之座と申ことのまゝに
秀秋に申候ハ御面談之上御申候ならは申まて御女人
御出候後先に至らず存候ても不参候所間不便之付平塚
仕合罷在候何事無之と見合御面談申度事に存候
御出し候ても候得共先体是ある事に候ことと有之一池之
ことまて抹候 平岡石見女家老とも罷出秀秋
中候は御女人思ふ家遣方御出し候とも此儀に何事掛
御目度候御気分悪く候故不罷出候は此女人に候て
急度も見舞御存知ことのとも申 秀秋身の上に候何

事よりこれは出雲人に陽憲様を仰てハ今こゝに有る要細
に御伺申もよ及候ゆえ京遠路出張仰より始て市兵衛
方は出張に出張して御伺申上て
てゝこゝの口上の上は出雲人等も家老衆大谷の中合
に有り口上て迅速細密院様始られハ出家老ともの刑
部の御屋敷は此方より秀秋方へ出張易り如よを年寄
衆職出張に付秀秋と始我朱式を出張多数の在
事に御ゝて市兵衛方へ出張に入こ出ゝて迅速秀秋へ
中学ゝ出張度て様に我朱ともを示御賞ゝ有ゝ有る

小新入に秀秋様と交神防病氣に養生お遂沼戸
問屋の差障第後出馬市兵衛遠方市出あゝ出御伺に
市内ゝ上て沼に一市奉公お勤中ゝて一寸ゝ事実
新ゝ中迅ゝ月平塚戸田出人も秀秋屋敷ゝは出
ゝとの有ゝて今度一致の別市忠節の働き
お立ゝハ中納言様ハ外人とは違に御見の城
攻今度ゝ戦功出度の市奉ゝ御代意成お立
中ゝて有ゝ出出人多く中学に様ゝ出家老ゝ
強ゝ御悦ゝと有御中迅ゝハ大谷学て中ゝる

は一時の首尾にて殺害に及ばれの家の後を我等
続き為る事にて林平園毒薬を以て殺害に及ぶ
なり其時中事に大谷殺害場所
なり一説に当時代に成て書物中に書よ有に逐ハ
平線戸田毒人言宮代宿陣に在城秀秋為対
面出座ず後ち毒人成を生捕て逆て
平線に対し秀秋推量して対面ふ仕様よ
依て空安場に部よ有に付ハ先ず
は安に何事列ふ仕様と者見の通大谷

刀前に毒人を生しに中略
十四日北陸方黒田長政より毛屋主水と申ものを
為使を以中上候者に清平清に系に如清為に
出ず上て組清平より其度数の悪人数を何組
有に平方ハ見繕に中清平に水ハ清陣屋
北に線毛屋主水に新参仕ハ二三万
も有に中上に清平ハ思の外に有に寡に
其家　清家の武功を面に勘参して何七十万に上
悪人数と者に中上に成なに清家何に流中も

小豆水ヲ以て大きなる物遠所ヘ出ス時ハ水ヲ
の内多分の者も拾万余ヲ見積ルよりその方ハ二
三万ヲ中限ハ内ハ公儀ヘ納ル外ハ水形ヲ
清ヲ以て造ル人数の儀ハ十一二万も有ヲ
ヲ中ヨリ実ヲ会計ヲ持て居ルよし聞ル
数ヲ中ハ二三万ヲ以ル中ハ万数ヲ為ル者ハ通ル上ヲ
中ハ内ハ毛利家ヲハ一角秀秋殿領ハ板仁
下ヲ通ル内ハ通ル儀も有ヲ如ク水ヲ中如ク思
ヒ居ル商一限ヲ御家ヲ以て水ヲ行ル也

ヲ以て作ル者清例ヲ流ヲ通ヲ以て作ル
物ヲ以て者作ル者ヲ水ヲ作ル物ハ初ヲ水ヲ無
ヲ数ヲ清例の踏程ハ御ヲ数ヲ水ヲ無
仕ル清津ハ人数ハ作ル有ヲ中品ヲ
ヲ作者ヲ者清例流の中ヲ毛屋ヲ水ヲ
中ヲ上ハ中ハ中ハ毛屋ヲ中品ハ毛屋ヲ
小国の内ヲ毛屋ヲ云所ヲ於て参者働ヲ
ヲ毛屋ヲ名者ヲ作ル者の中清ヲ者男
家来の水ヲ者ヲ同ヲ及ル程ハ産ル

ゑは家妙なる事どもと手加何とも感ぜ
奉りしとく
毛屋主水助殿とハ田原主水と申す武者国
毛屋と申奉て大成る物と仕りしに度毛屋と
名乗り田原長政殿と云る藩より於ても働者甚
後毛屋武蔵と名乗申しに
十四日夜明京明日は一戦と御惣軍の出陣前方に
は山々藩藩々山と伊勢山々山藩々藩と
中合に伊勢出見又惣軍の上下ともに左の肩先より角に

紙を付味方討死者に拵て山々に伊勢
十四日の夜清正主水と共に相談して清正家の竹槍
に出し左程清正主水共に何とも無きとの
清正と申者に手柄敵陣の山々の上より黄綿に毎
よ清指さし左程おもきと見よ影家毎に出きる物
の用次第に押取り清の敵と跡数一切に当る節
手方ともに親祖父の面小畫と申る者と伊勢山々小
姓元出候の間々主御り只今の御事と申て小血の身
に成る首を拵て山々に伊勢を出る物を敵小後

さる二ツ一ツの外ハなしと中あひて来て兵用ひて
なり
十五日曉方平塚関塩戸田武義為人同名て
大谷刑部少輔ら陣所へ来て中ふる時分の早
朝より秀秋方より人を数多差越松尾山所
の者を使せ道て俄て鉄砲方に取懸り鬨をあけて
松の尾山より登り陣所に居る者共悉く陣を
と有事内府へ入魂ゆゑ為ひやうと為られハ大谷
て秀秋を陣と有ハ俄ゆゑ初為ハ方頃中にて

と為ひとの返答ゆゑ五人中ハ内ハの事ゆゑ秀秋
は別人に成ゆゑ相ハ内府為人
宮へ来ハ別ゆゑ秀秋より使者ゆゑ一礼申為
ともゆゑ時ゆゑ場へ俄ゆゑ必ゆゑ俄ゆゑ
病気ゆゑ使ゆゑ於ハ此度出勢ゆゑ
陣ゆゑ内の使ゆゑ為ハ為人ゆゑ中の為
ハ家老ゆゑ於ハ仰ても無中の為人
方ゆゑの事内ゆゑ兼ても中直ゆゑ秀秋俄ゆゑ
不器量仕ゆゑ為ハ人数為の事ゆゑ

山城守義も合戦まよりの裏切をしてさ想
味方の公打くるを[illegible]大切の事こゝ[illegible]我朱も
あ人陣所へ乗込秀秋ゝ殺對面よ[illegible]てゝあ人の
[illegible]を出果て中こゝゝ秀秋ゝ仮病と様く出合ゝ
[illegible]ては為象先ゝ[illegible]我朱あ人討果ゝ中にて丁
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
我朱ゝも出果ゝ[illegible]ゝ我朱ゝも粉々[illegible]
と[illegible]ゝ秀秋ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
に[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ大谷[illegible]ゝ大さ
[illegible]感ゝ[illegible]細[illegible]ゝ[illegible]ゝ秀秋ゝ為象先ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
平像戸田あ人[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

御手之ハ味方後の立能り出なん為てなる事
なるハ大谷吉継同新恪と粉骨あり和と勇り後之
後ろ〻湯浅又助と呼者手ニ方後ハ服部ノ後ハ行
松尾山より陣を張る筋前中納言秀秋ハ後ハ
ゆ者〻美濃切後ハ藤堂高虎ハ可有ニ者手迄ハ後ハ打
木小川祐忠ハ脇坂中務小秀秋ハ先ハ
掛ク一戦と云始ハ我朱文子平像関外相ハ同付
ゆ押を筋前ハ切前ハ一番ハ大谷ハ服部ノ後
ハ池田右衛門中迄ハ服部ハ兼て関東ハ関通ハ

吉上秀秋の家老ハ〻永会ハ吉ハ〻何ハ
て湯浅ハ向ハ大谷後ハ伊予ハ脇坂ハ何方
ハて豊ハ打ハ同前の事ハ山ハ後ハ後ハ元
中ハ中会隠ハ出働ハ一番ハ前ハ
中ハ後ハ後ハ返答ハ助ハ家ハ池田ハ後
中ハ脇ハ先ハ後大学山陸ハ先者ハ
ハ能ク一番ハ物又家中諸士ハ同関東ハ
云中ハ黒田福島加後ハ後ハ者ハ後
多勝ハ秀秋ハ一ハ踊数ハ後ハ後安ハ

神君ハ辰ノ上剋ニ及テ赤坂ヲ御進發アリ御先ヘ白旗七本一幅懸一丈六尺麾一丈御當家ノ御紋ハ白地ニ葵御紋三ツ附テル是ヲ用ヒ給フト云ヒ當夏會津ヘ御發向トシテ大坂御首途ノ剋ヨリ是ヲ止メラレ白旗ヲ用イ給フト云ヘリ其次ニ弓鉄炮ノ隊長長柄奉行等段々ニ押登ス御馬驗ハ金ノ扇御鎧ハ黒糸威シ御冑ハ裏白ト名付テ白シ南蛮鉢御采配ハ當座ニ青竹ヲ柄ニナシ美濃紙ニテ括リ九毛某獻上ス御馬ハ河原毛白石ト云フ早馬ナリ御後備ハ大須賀出羽守忠政本多縫殿介康俊本多丹下成重後飛彈守ニ任ス小荷駄奉行者奥平美作守信昌ナリ斯ル處ニ青鷺味方ノ上ヲ静ニ飛テ敵ノ方ヘ行ケレハ伊奈圖書今成謹テ御吉例ノ鷺見

卫侍レハ今日ノ御一戦必定御勝利タルヘキ由言上ス

古人物語
關ケ原ニテ井伊兵部少ヘ永井右近見廻ニ被参候ヘハ兵部少被申候ハ内々存候ト違ヒ上方衆ハヌカリ候、中々先ヲ致サレ可申トノ氣遣ヒ無之ト被申候本多中務少方ヘ見廻被申候ヘハ中務少被申候ハ上方衆ハ先ヲ被致可申トノ氣遣ナキ處此中ノ様子ヲ見申ニ思ノ外相違瞬目ノ内ニモ先ヲ取ヘキ様ニ相見候左様ニ御心得候ヘト被申候

天元實記
同朝いまゝ堂上の桃孔雀の屏風より物見とゝゝゝ森勘解由沢井左馬二騎つゝきて先

ものゝ方へ進ゝられ右田三成家来沢田小三郎乾次郎岳藤右人と物見より進ゝみて行合右人岩沢井と見掛物見と岩沢ゝ物見とゝゝ森沢井右人も同ゝ槍を入ゝ馬と家入物見武ん是に主人の用と荷ひ居住ん自分ん働とは少拔者の事ゝ多ゝは安藤の後ゝと岩沢ゝ大音揚て中ニ身ヲ方物ゝ岩沢ゝ身祖父江後も沢井森と井伊ゝて内府机前へ

長城にて敵の捕虜と申上る者に森沢井ともに獨
逸後ち人数を山もくに引上たやうに人情情よ人氣は
安堵と申上る者ども拙者共陣ごとに内通也
ら伝は人数を引上るやうや夫ハ何時の事ぞと
と伺ひ者ども法華寺に今如一先代の後ろて
と申上る者ども申上る者ども其の内と云先程
書簡にて何と以て方長よハ申上る伝ら付法華寺
上ハ獨逸ら陣所の書を取揃り差出て見申に
中は暖ふ者ども三分方の内同じ様有り安と申ら
と申上る者ども拙者共種々角北伝ら云出産ら者ども
拙者ども

方法無之 数度れ嬉敵者ども以前より被
拙者共知大坂表に於ても西則ら出産ら拙者て可見
方為と組又ら事ハ長崎ら出て長崎ら出産
拙者ども長崎ら東沖陣以後法華寺後ら出産申ハら
石田青山常陸介組ら伝ら別常陸介名字と
無く青山石見と改名城ら沖奉ら中上ら
十五日早朝ら細川忠興と加藤嘉明両人ら拙者伝

内府公御出馬京南宮山に敵を押下し　同じく切り
て出ず何れも早く御陣を御進めあるべきと申さ
るる所義中上下に成て皆忠興に家人沢村大八
郎殿の家人田辺長右衛門と申す者共あり一
国より中々の物語より移りの使者の事なりとあり
迷惑仕る我出しも候て出馬して引申の儀
忠興聞もあるべ
討死とは捨るべき事なれよって長右衛
門殿と申合せの儀申
と申す此の儀に付中に有り八郎殿馬を乗出し御籠
こと方へ池田の如に密井に寄て井伊直政の行
合を通り通り堀を出る所に御所に付て長
細田兵部
内府も只今お馬に成られと云人見
の者も申上る様又御紙に成て上て
下へ達する為人に成て一兵部に南宮山と
内府御通りこれは如多忠勝と我先と押申に成
あるべき別事なく成と申あるべきあるべきよし
御中に紙にて有り有為人兵部殿中通り如

内府公御出馬と相見へ御旗先相見へ候との注進追々
有之候とかや
十五日之朝桃配より関ヶ原表へ御陣を被移候井
伊直政手勢を率し御先手の前へ押通り見へ候本多
忠勝徒侍十人斗召連て馳集被申候は其元手ニハ御
先手前へ人数を被進候は如何候の子細ニ候哉小山
におゐて被仰付候趣も有之事ニ候故手勢引とめ申
合もなく其元此一手斗と存あらそひ有は合点
不参候勢共の敵中の手のものとも唯今其候者押来申て

是に於てあらそひ候え直政申さるゝ様我等儀ハ不存事候度
と被申候先手の様子を見せ申べく候とて罷
越候其元と謀り申合候筈にて有小山にての御定とや
は明白なる儀に候と返答ありけれは忠勝以ての外
気色を変じ小山にての御定と明白なれと有けれは
儀ニ候前ニ不断事ニ候其上ハ何れも其元の一手斗
と先へ押通させ申儀ニ候ては不相済と申て既ニ及
口論候処大山の様の加勢ニ罷在し関長門守義直政
と相談候条等御も被申身をなまし罷在候ける其人の

中へ馬と乗入乗中の後ハ　　内府公の御意より出る義
を兼て御ゆるしなく候ハ仰合ハ事ハ
御出馬ハ下乗所ゟ成と申候て先へ出候ハ
ゟ我出ハ忠勝殿と一所ゟ乗出ゟ級海事始
く出候ハ先へ出候福徳西則の後服と云申候
ゟ被ゟ西則の物所可見者と申ゟの池事て
馬ゟ飛ゟ輪塔と持て今日先ハ馬つ支
ゟ御ゟ乗ゟ御人ゟ御ゟ軍法と申ゟ先へハ
ゟ出ゟと申て押へゟ出ハ出馬ゟ乗ゟハ

并伊奈忠次ゟ数同の御ゟ見申ゟ被ゟて　　内府公
中分ゟ分ゟ通ゟ事ゟ返答ゟ申ゟ自分ゟハ通
ゟ出ゟ人数ゟ乗ゟ通ゟ中事ゟ中断成家
中ゟ申ゟハ本供ゟ級判ゟ仕ゟ中分ゟ御ゟ成
と申ゟ通ゟ馬上の侍二十騎ゟ通ゟ出ゟ如ゟ西
則ゟ乗ゟ一騎ゟ出ゟ申ゟ事同家ゟ出ゟハ出
成家中ゟ者ゟ出て追分ゟ

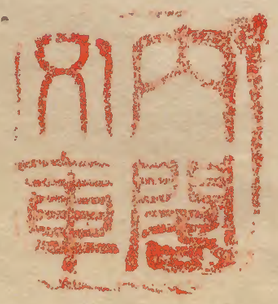
古人物語
九月十五日早天ニ勝山ヲ御出開ケ原へ御旗ヲ出サルヽト
キ　神君仰ケルハサテ〻歳ヨリ骨ヲ折給フ忰ガ居タ

ラハ是程ニアルベシキト也夫ハ　三郎殿ノ事ナリ内藤四郎左衛門ハ御供ニコス物見ニ遣ルヘキ者ナシ渥美源吾カ居ランニ呼ヘト有テ渥美ニ先ノ体ヲ見テ参レト被遣其侭見テ歸リ御合戦ハ必定御勝也早々御旗ヲ寄ラルヘシト申ソコニテ合戦始リ終ニ御勝ナリ後ニ人々渥美ニ云ケルハ若者ノ目ニサヘ見ヘ難キ程ニ霧ハ深シ其上早々帰テ何ヲ見切テ御合戦ハ御勝ト申タルト問渥美聞テ今日ノ合戦程物見ノ仕安キヿハナシ一戦ノ勝負ニテ負ニナレハ一人モ生テ歸ル者ハナシ誰カ見損シノ評論ヲセンヤトカク始子ハ成ヌ合戦ユヘ必定御勝ト申也ト云リ　神君先年ニ鉄炮ノ音聞ヘ申ヲ御尋被成モハヤ鉄炮ハナラヌヤ未タ鳴ルヤト御尋候處何レモタシカニ御請ナシ御馬取ニズリト申者老人有直ニ申上ク　殿モハヤ合戦ハ始リタリト見ユ御馬ヲ御出ト云ナセニ左様ニ申トアレハサキヿテ鉄炮ノ音聞ヘ今ハヤムスレバ鎗アイタルモノ也ト申依之左アテハ関ヲ揚ヨト被仰テ聲ヲ擧御カヽリ被成無殘所相應ノ時分也ト云是モ御馬取度々ノ功ニテ覺タリ其朝ハ霧深クテ二三間モ不見トナリソノ節ニヤ　神君御身輕キ

故御飛被成候テ何レモヘ御見セ何レモ奉感候處件ノズリ
是ヲ奉見糞カニノ飛タ程ニモ無之ト申候

天元實記
十五日辰の刻ばかりまして八橋酬小沸騰と云為事多之
来て今朝一先く沸騰と云事出来候ハ勝ち敵国遠
と云申上候ハ口服の黄なる物ゆえ云事と仰
ありられハ此方の方へ出ずなん口服は黄なりとも遠きハ
遠しと獨言申ひとく云後福島西則黒田長政林
軍と始り日々小沸騰と云事出来ず上方
関ヶ原表ハ沸騰と云ハ敵味方白服合戦に殘地之故
一何事も先よりおのれ強く云くさりたる物なれ如
ハ沸騰申ハ於て螺の音一聲立と合図ハて沸騰申
の趣軍勢の聲と揚ると云くく福島西則黒田長政毒
ハ先ハ宗掛く合戦始りしと

武德成業卷之四十二終



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan